

記 録

文書番号	SCJ 第 24 期 020804-24341000-024
委員会等名	日本学術会議史学委員会歴史学とジェンダーに関する分科会
標題	歴史学とジェンダーに関する分科会記録
作成日	令和 2 年（2020 年） 8 月 4 日

※ 本資料は、日本学術会議会則第二条に定める意思の表出ではない。掲載されたデータ等には、確認を要するものが含まれる可能性がある。

第24期 記録

日本学術会議 史学委員会 歴史学とジェンダーに関する分科会

文責 第24期委員長 井野瀬久美恵

第24期「歴史学とジェンダーに関する分科会」は以下の日程で開催された。いずれの会合でも、高校歴史教育改革（2024年度から実施される新たな高等学校学習指導要領にもとづく）を踏まえた諸議論、さらには教科書執筆の進捗状況を念頭に置きながら、「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」という新たに設置される新科目において、「歴史的思考力を養う」ためにはジェンダー史の視点が不可欠であることをどのようにして徹底していくかが議論の中心となった。議論では、第23期の提言（案）「歴史的思考力を鍛えるために—新たな高校歴史科目へのジェンダー史の導入」を継承発展させ、再整理して、提言本文に加えて「アクティブ・ラーニング事例集」を付録とすることも提案され、具体的な作業も開始した。

その際、提言のポイントは以下の2点に置かれた。第一に、教科書の執筆、検定、その後の採択プロセス、さらには学校現場における教育実践のなかで「無意識のジェンダーバイアス」を意識、克服し、生徒ひとり一人の可能性を最大化するための具体的な手法や提案である。第二に、学習する生徒たちのエンパワーメントを重視して、過去の人びとの葛藤・苦悩・闘争の意義を知り、そこから現在を、さらには未来を展望することである。

しかしながら、第24期が始まった2017年秋の時点ですでに歴史総合などの新科目についての学習指導要領が公表され、同時期に新科目の教科書執筆が進行中であるというタイミングのなかで、何を本分科会の「政策提言」とすれば効果的か、議論の出口が見えづらくなってきた。

加えて、歴史教育における「無意識のバイアス」を払拭するための説得力のある「エビデンス」とは何なのかについても疑問が出されるようになった。これらを受けて、第24期の提言作成を断念し、「記録」として上記の活動、とりわけ試行錯誤のプロセスを残すことになった。そのうえで、政策提言としてジェンダー史の視点が提示しうる「エビデンス」の性格や可能性を考えるために、今後教育上も依存度が高くなると思われるAIに潜むジェンダーバイアスについて、行木陽子氏（株式会社日本IBM グローバルビジネスサービス事業部技術理事）の報告から学ぶ機会を設けた。

第25期においては、本記録に記した第24期の試行錯誤を踏まえて、2020年度に検定が行われて2021年初夏に公開される「歴史総合」の教科書を参照しつつ、この問題に関してどのような「政策提言」があり得るのか、また提言発出の時点において有効なのかについて、議論を継続していただきたい。

◆第24期分科会開催

- 第1回 2018年2月9日（金）15時～17時
- 第2回 2018年10月22日（月）13時～15時
- 第3回 2019年6月7日（金）13時～16時
- 第4回 2020年3月16日（月）14時～16時
- 第5回 2020年6月12日（金）14時～16時30分

◆第24期「歴史学とジェンダーに関する分科会」分科会委員

委員長	井野瀬久美恵	(連携委員)	甲南大学文学部教授
副委員長	久留島典子	(第一部委員)	東京大学史料編纂所教授
幹事	小浜正子	(連携委員)	日本大学文理学部教授
	來田享子	(連携委員)	中京大学スポーツ科学部教授
委員	粟屋利子	(連携委員)	東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
	長 志珠絵	(連携会員)	神戸大学大学院国際文化学研究科教授
	海妻径子	(連携会員)	岩手大学人文社会科学系准教授
	京樂真帆子	(連携会員)	滋賀県立大学人間文化学部教授
	小玉亮子	(連携会員)	お茶の水女子大学教授
	高澤紀恵	(連携会員)	法政大学文学部教授
	高橋裕子	(連携会員)	津田塾大学学長・教授
	永原陽子	(連携会員)	京都大学大学院文学研究科教授
	姫岡とし子	(連携会員)	東京大学名誉教授
	平野千果子	(連携会員)	武蔵大学人文学部教授
	星乃治彦	(連携会員)	福岡大学人文学部教授
	松本直子	(連携会員)	岡山大学社会文化学研究科教授
	三成美保	(第一部会員)	奈良女子大学副学長・研究院生活環境科学系教授
	桃木至朗	(連携会員)	大阪大学文学研究科教授

